

小中学校教員の性に関する知識の実態

栗野智美*・廣原紀恵**・古池雄治**

（2020年8月31日受理）

Actual Conditions of Sexual Knowledge by Elementary School and Junior High School Teachers

Satomi AWANO*, Toshie HIROHARA** and Yuji KOIKE**

（Accepted August 31, 2020）

はじめに

近年、性に関する様々な課題が社会問題となっている。性感染症の1つである梅毒は、平成22年は621件だった新規罹患者報告数が、令和元年には6639件にまで急増しており¹⁾、この中には15～19歳の未成年も263件含まれている²⁾。さらに、日本ではHIV/エイズについて感染防止のために研究や取り組みなどの様々な対策がなされているにも関わらず、平成30年の新規罹患者報告数は、HIV感染者とAIDS患者を合わせて1317件³⁾あり、大幅な減少には至っていない。また、情報化社会により子どもたちの間にはスマートフォンをはじめとする携帯電話が普及し、小学生では55.5%、中学生では66.7%、高校生では97.1%⁴⁾の児童生徒が携帯電話を所持している。しかし、その中で、出会い系サイトやアダルトサイトなど、青少年に不適切な情報の閲覧や利用を制限することができるツールであるフィルタリングサービスを使用している割合は「小学生で27.2%、中学生で47.4%、高校生で45.8%」と決して高くなく、子どもたちがSNSを介した性犯罪の被害者となる例も少なくないと考えられる⁴⁾。加えて、LGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシャル・トランスジェンダー）や性的マイノリティに対する理解の推進も課題である。近年、「LGBT」「性的マイノリティ」といった言葉をテレビや新聞で聞く機会も多くなり⁵⁾、茨城県や大阪府など一部自治体での同性パートナーシップ証明制度導入⁶⁾⁷⁾など、社会に変革がもたらされている。しかし、「いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン」が行った調査⁸⁾によると、LGBT当事者またはそうかもしれないと考えている対象者のうち68%は学生時代に「身体的暴力」「言葉による暴力」「性的な暴力」「無視・仲間はずれ」のいずれかを経験している」とされ、性的マイノリティに対す

*茨城県筑西市立下館北中学校（〒308-0007 筑西市折本895；Shimodate Kita Junior High School, Chikusei 308-0007 Japan）。

**茨城大学教育学部教育保健教室（〒310-8512 水戸市文京2-1-1；Laboratory of Health Education, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）。

る差別や偏見が完全に払拭されたとは言い難い状況にある。

このような性に関する様々な課題は、現代を生きる全ての子どもたちにとって、身近なものとなりつつあると言っても過言ではないだろう。それに伴い、学校現場で行われる性に関する指導が一層重要視されると思われる。

現在、学校では保健体育の時間を中心に性に関する指導が行われている。しかし、上野ら⁹⁾は、「児童生徒の性教育に対する興味・関心を高めるには保健以外の教科でも性の学習を行い、その内容を統合し発展的に捉えられるような性教育を実施することが必要である」と述べている。このように、学校における性に関する指導は、全職員の共通理解の下に、学校教育全体を通して行われることが望ましい。橋本ら¹⁰⁾は、性に関する指導を行う教員は中学校では「保健体育科担当教諭」81.2%、「養護教諭」42.1%であったと報告し、西頭ら¹¹⁾は中学校教員対象の調査によると性に関する指導を行う教員は「保健体育教師」が93.0%、「養護教諭」が44.2%としている。遠藤と中野¹²⁾の小・中・高等学校教員対象の調査によると、小学校では86%、中学校では50%の教員が性に関する指導に関わっているとされ、教科担任制となる中学校でも、約半数の教員が性に関する指導に関わっている。橋本ら¹⁰⁾の調査対象人数は約1000人で、西頭ら¹¹⁾、遠藤ら¹²⁾は100人未満であるが、結果はほぼ同じであり、おおよその結果を反映したものと言える。下野ら¹³⁾は、「すべての教員が、性教育の担い手としての自覚とともに、正しい「性」に関する知識を持ち、それを教育するときに必要な繊細な配慮を行うことが求められる」としており、全教員が性教育に対し当事者意識を持ち、また性に関する正しい知識を持つことの重要性を指摘している。しかし、これまで教員対象に「妊孕性」や「LGBT」のように限局した知識を調査したものはある^{14) 15)}が、性に関する知識全般について小中学校教員がどの程度正しい知識を持っているか実態を調査した報告はない。本研究は、小中学校の教員を対象に質問紙調査を行い、教員の性に関する知識の現状を明らかにすることを目的とした。

研究方法

A県内の小中学校の学校長に調査の依頼をし、承諾を得た66校(教員1210人)に質問紙を配布し、58校(638人)から回答を得た(回収率52.7%)。質問紙の回答の一部に不備があったものを除き、532人を分析の対象とした(有効回答率83.4%)。質問内容は独自に作成し、内容は①調査対象者の基本属性、②性に関する指導についての指導観、③性に関する価値観・倫理観、④性に関する知識の4項目から構成された。分析には、Microsoft Excel 2010とSPSS (Version19.0 for Windows)を使用し、検定には χ^2 検定を用い、有意水準は5%とし、統計処理を行った。自由記述に関しては、内容を1つの意味ごとに1コードとして抽出した。カテゴリー化に関しては、研究者間で十分に検討を行った。本研究で用いた質問紙は自己記入式・無記名として匿名性を確保し、プライバシーの保護に努め、回答の提出をもって調査に同意を得たものとした。なお、本研究は茨城大学教育学部研究倫理委員会の承認を得た。(承認番号18P5000)

結 果

(1) 対象者の基本属性

対象者の基本属性を表1～表5に示した。

男性は257人(48.3%)、女性は275人(51.7%)であった。(表1)

年齢は男女ともに「50歳～」が最も多く、男性81人(31.5%)、女性90人(32.7%)であった。次いで男性は「30歳～」61人(23.7%)、女性は「20歳～」68人(24.7%)であった。(表2)

教員経験年数は男女ともに「1～5年」が最も多く、男性58人(22.6%)、女性62人(22.5%)であった。次いで男性は「31～35年」44人(17.1%)、女性は「6～10年」44人(16.0%)であった。(表3)

職種は男女ともに「教諭」が最も多く、男性210人(81.7%)、女性216人(78.5%)であった。次いで男性は「校長・副校長・教頭」46人(17.9%)、女性は「養護教諭」35人(12.7%)であった。(表4)

勤務校種は、小学校265人(49.8%)、中学校267人(50.2%)で、男性は257人(48.3%)、「中学校」が多く、女性は275人(51.7%)で、「小学校」が多かった。(表5)

(2) 性に関する知識について

①性に関する知識について「コンドームを使用すれば、確実に避妊をすることができる」「アフターピルを用いれば、9割は妊娠を回避できる」等10の質問項目を設け、「正しいと思う」「間違っていると思う」「わからない」の3つから選択させた結果を表6、正解率を図1に示した。表6では、正解を太字で示した。正解が多い項目は「コンドームを使用すれば、確実に避妊することができる」男性230人(89.5%)、女性

表1 性別 (N=532)

	n	%
男性	257	48.3
女性	275	51.7

表2 年齢 (N=532)

	男性 (n=257)		女性 (n=275)		全体 (N=532)	
	n	%	n	%	n	%
20歳～	59	23.0	68	24.7	127	23.9
30歳～	61	23.7	51	18.5	112	21.1
40歳～	50	19.5	56	20.4	106	19.9
50歳～	81	31.5	90	32.7	171	32.1
60歳～	6	2.3	10	3.6	16	3.0

表3 教員経験年数 (N=532)

	男性 (n=257)		女性 (n=275)		全体 (N=532)	
	n	%	n	%	n	%
1～5年	58	22.6	62	22.5	120	22.6
6～10年	37	14.4	44	16.0	81	15.2
11～15年	30	11.7	26	9.5	56	10.5
16～20年	15	5.8	27	9.8	42	7.9
21～25年	27	10.5	31	11.3	58	10.9
26～30年	29	11.3	28	10.2	57	10.7
31～35年	44	17.1	39	14.2	83	15.6
36年以上	17	6.6	18	6.5	35	6.6

表4 職種 (N=532)

	男性(n=257)		女性(n=275)		全体(N=532)	
	n	%	n	%	N	%
校長・副校長・教頭	46	17.9	18	6.5	64	12.0
教諭	210	81.7	216	78.5	426	80.1
養護教諭	1	0.4	35	12.7	36	6.8
栄養教諭	0	0.0	6	2.2	6	1.1

表5 勤務校種 (N=532)

	男性 (n=257)		女性 (n=275)		全体 (N=532)	
	n	%	n	%	n	%
小学校	91	35.4	174	63.3	265	49.8
中学校	166	64.6	101	36.7	267	50.2

248人（90.2%）、「人工妊娠中絶は、妊娠期間中であればいつでもできる」男性227人（88.3%）、女性247人（89.8%）であった。正解が少ない項目は、「アフターピルを用いれば、9割は妊娠を回避できる」男性40人（15.6%）、女性54人（19.6%）、「性器クラミジア感染症の罹患者数が最も多いのは、10代の女性である」男性45人（17.5%）、女性53人（19.3%）であった。「わからない」が多い項目は、「性器クラミジア感染症の罹患者数が最も多いのは、10代の女性である」男性134人（52.1%）、女性151人（54.9%）、「日本で1番罹患者数の多い性感染症は、梅毒である」男性123人（47.9%）、女性149人（54.2%）であった。また、「子宮頸がんはウイルス性のがんである」

表6 性に関する知識について(N=532)

		男性 (n=257)		χ^2	女性 (N=275)		全体 (N=532)	
		n	%		n	%	N	%
①コンドームを使用すれば、確実に避妊をすることができる。	正しいと思う	15	5.8	*	5	1.8	20	3.8
	間違っていると思う	230	89.5		248	90.2	478	89.8
	わからない	12	4.7		22	8.0	34	6.4
②アフターピルを用いれば、9割は妊娠を回避できる。	正しいと思う	40	15.6	n.s.	54	19.6	94	17.7
	間違っていると思う	144	56.0		134	48.7	278	52.3
	わからない	73	28.4		87	31.6	160	30.1
③日本で1番罹患者数の多い性感染症は、梅毒である。	正しいと思う	53	20.6	n.s.	44	16.0	97	18.2
	間違っていると思う	81	31.5		82	29.8	163	30.6
	わからない	123	47.9		149	54.2	272	51.1
④女性は、閉経しない限りいつでも妊娠・出産することができる。	正しいと思う	48	18.7	**	75	27.3	123	23.1
	間違っていると思う	139	54.1		151	54.9	290	54.5
	わからない	70	27.2		49	17.8	119	22.4
⑤精子の質は、年齢とともに低下する。	正しいと思う	189	73.5	n.s.	186	67.6	375	70.5
	間違っていると思う	28	10.9		28	10.2	56	10.5
	わからない	40	15.6		61	22.2	101	19.0
⑥人工妊娠中絶は、妊娠期間中であればいつでもできる。	正しいと思う	4	1.6	n.s.	3	1.1	7	1.3
	間違っていると思う	227	88.3		247	89.8	474	89.1
	わからない	26	10.1		25	9.1	51	9.6
⑦性器クラミジア感染症の罹患者数が最も多いのは、10代の女性である。	正しいと思う	78	30.4	n.s.	71	25.8	149	28.0
	間違っていると思う	45	17.5		53	19.3	98	18.4
	わからない	134	52.1		151	54.9	285	53.6
⑧子宮頸がんは、ウイルス性のがんである。	正しいと思う	73	28.4	***	124	45.1	197	37.0
	間違っていると思う	67	26.1		54	19.6	121	22.7
	わからない	117	45.5		97	35.3	214	40.2
⑨HIV/エイズの原因の約7割は、男性間の性的接触である。	正しいと思う	55	21.4	n.s.	55	20.0	110	20.7
	間違っていると思う	99	38.5		96	34.9	195	36.7
	わからない	103	40.1		124	45.1	227	42.7
⑩性別違和が発現するのは、高校生以降である。	正しいと思う	2	0.8	n.s.	2	0.7	4	0.8
	間違っていると思う	196	76.3		218	79.3	414	77.8
	わからない	59	23.0		55	20.0	114	21.4

*** : p<0.001 ** : p<0.01 * : p<0.05 n.s.:有意差なし

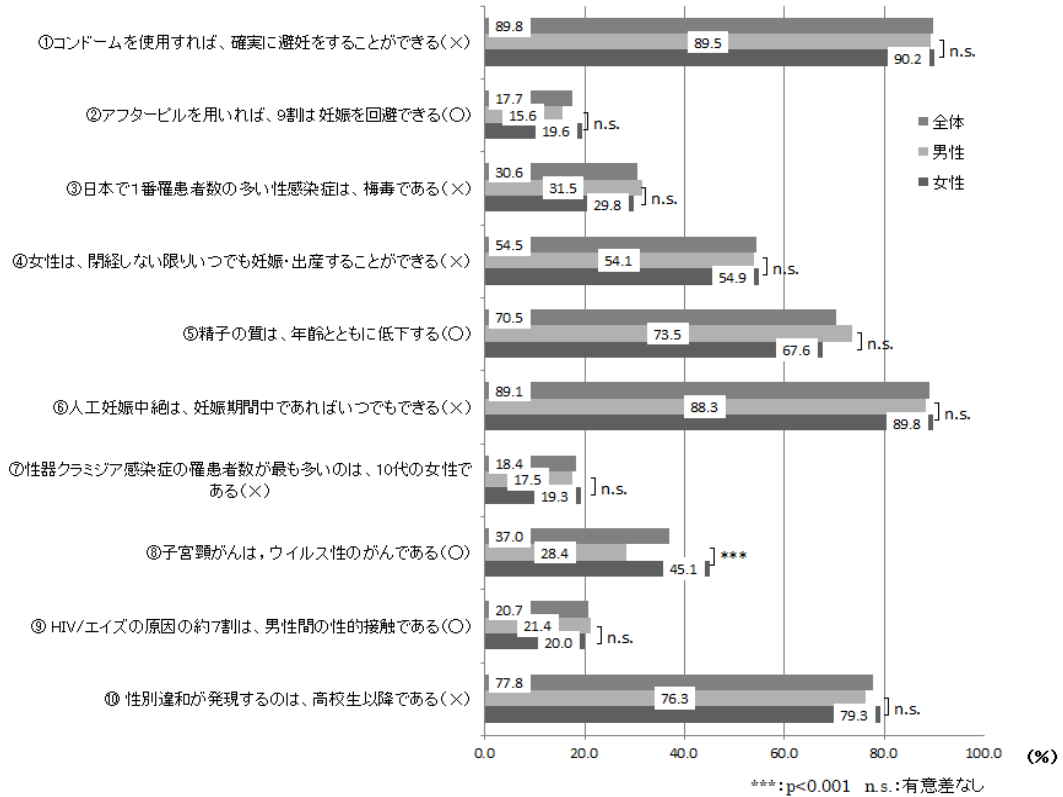


図1 性に関する知識の正解率 (N=532)

($p < 0.001$), 「女性は、閉経しない限りいつでも妊娠・出産することができる」($p < 0.01$), 「コンドームを使用すれば、確実に避妊することができる」($p < 0.05$) で正解率と性別の間に有意差が見られ、女性は男性よりも正解率が高い傾向にあった。

また、「正解」には2点、「誤答」「わからない」には0点として点数化した結果、平均点10.1点(±3.51)であった。14点以上を高得点群、7～13点を中間得点群、6点以下を低得点群とした結果を表7に示した。男女ともに「中間得点群」が最も多く男性166人(64.6%),女性168人(61.1%)であった。性に関する知識の得点と性別の間には有意差は見られなかった。

表7 性に関する知識について (N=532)

	男性 (n=257)		χ^2	女性 (n=275)		全体 (N=532)	
	n	%		n	%	n	%
低得点群 (n=89)	45	17.5	n.s.	44	16.0	89	16.7
中間得点群 (n=334)	166	64.6		168	61.1	334	62.8
高得点群 (n=109)	46	17.9		63	22.9	109	20.5

n.s.: 有意差なし

②「LGBT」「性別違和」「家族計画」「デートDV」の性に関する4つの語句について、質問紙上に意味を記載し、「語句とその意味についてよく理解していた」「だいたいの意味は理解していた」「語句について聞いたことはあったが、意味は知らなかった」「語句について聞いたことがなかった」の4つから選択させた結果を表8に示した。「語句とその意味についてよく理解していた」「だいたいの意味は理解していた」が多かったのは「LGBT」「家族計画」であり、「語句について聞いたことはあったが、意味は知らなかった」「語句について聞いたことがなかった」が多かったのは「性別違和」「デートDV」であった。「性別違和」,「家族計画」,「デートDV」の認知と性別間には有意差が見られた ($p<0.05$)。残差分析の結果,「性別違和」では男性の方が多く「語句について聞いたことがなかった」,「家族計画」「デートDV」では女性の方が多く「語句とその意味についてよく理解していた」と回答していた。

表8 性に関する語句とその意味についての理解の程度 (N=532)

		男性 (n=257)		χ^2	女性 (N=275)		全体 (N=532)	
		n	%		n	%	N	%
LGBT	語句とその意味についてよく理解していた	93	36.2	n.s.	94	34.2	187	35.2
	だいたいの意味は理解していた	141	54.9		151	54.9	292	54.9
	語句について聞いたことはあったが、意味は知らなかった	16	6.2		21	7.6	37	7.0
	語句について聞いたことがなかった	7	2.7		9	3.3	16	3.0
性別違和	語句とその意味についてよく理解していた	49	19.1	*	58	21.1	107	20.1
	だいたいの意味は理解していた	125	48.6		158	57.5	283	53.2
	語句について聞いたことはあったが、意味は知らなかった	28	10.9		23	8.4	51	9.6
	語句について聞いたことがなかった	55	21.4		36	13.1	91	17.1
家族計画	語句とその意味についてよく理解していた	89	34.6	*	134	48.7	223	41.9
	だいたいの意味は理解していた	125	48.6		112	40.7	237	44.5
	語句について聞いたことはあったが、意味は知らなかった	27	10.5		17	6.2	44	8.3
	語句について聞いたことがなかった	16	6.2		12	4.4	28	5.3
デートDV	語句とその意味についてよく理解していた	77	30.0	*	115	41.8	192	36.1
	だいたいの意味は理解していた	109	42.4		99	36.0	208	39.1
	語句について聞いたことはあったが、意味は知らなかった	29	11.3		25	9.1	54	10.2
	語句について聞いたことがなかった	42	16.3		36	13.1	78	14.7

* : $p<0.05$ n.s.: 有意差なし

③「性に関する相談を、児童生徒から受けたことがありますか」と尋ねた結果を表9に示した。「受けた経験がある」男性61人(23.7%),女性87人(31.6%),「受けた経験はない」男性196人(76.3%),女性188人(68.4%)であった。児童生徒から性に関する相談を受けた経験と男女間の回答のし方には有意差が見られた ($p<0.05$)。残差分析の結果,女性の方が多く「受けた経験がある」と回答する傾向が見られた。

また、児童生徒から性に関する相談を「受けたことがある」と答えた148人に、相談内容を自由

表9 子どもから性に関する相談を受けた経験があるか (N = 532)

	男性 (n=257)		χ^2	女性 (n=275)		全体 (N=532)	
	n	%		n	%	N	%
ある	61	23.7	*	87	31.6	148	27.8
ない	196	76.3		188	68.4	384	72.2

* : p<0.05

表10 児童生徒から受けた性に関する相談内容 (n = 107)

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード (コード数)
異性との関わり	恋愛相談	「好きな人がいる」「異性と上手く話せない」(10)
	男女交際	「恋人とのデート内容について」「付き合っている相手について、先生はどう思うか」「中学生が20歳以上の男性と交際することはどうなのか」(7)
月経	月経	「月経痛がひどく、学校生活に支障がある」「生理不順ですと生理が来ない」「月経によって、精神的に不安になる」(22)
性被害	性的虐待	「父親から性的虐待を受けている」「家庭内で性的虐待を受けている」(6)
	接触やかからかい	「男子から胸を触られる」「クラスメートに身体を触られる」「卑猥な言葉でからかってくる男子がいる」(6)
	レイプ	「レイプをされた」(3)
	裸を見られた	「同級生に裸を見られた」(2)
	デートDV	「デートDVにあっている」(1)
	リベンジポルノ	「リベンジポルノ被害に遭い、写真を拡散されたり動画をSNSに挙げられた」(1)
二次性徴	身体的変化	「胸の大きさについて」「性器の悩み」「発毛について」(14)
	性徴の遅れ	「初経がまだ来ない」(5)
性交渉	性交渉の誘い	「交際相手から性的関係を迫られる」「自分は性行為をしたいが、相手はどう思うのだろうか」「相手のことは好きだが、性行為をするのは怖い」(16)
	後悔	「性交渉をしてしまった」(2)
	好奇心	「性行為は痛いのか」(2)
	友人が行っている	「友達が性交渉をしている」(2)
避妊	避妊について	「避妊に失敗した」「性行為をする際コンドームを使用せず膣外射精を行っているが、妊娠しないか心配」(5)
妊娠	予期せぬ妊娠	「妊娠したかもしれない」「性交後、月経が来ない」「妊娠したが、出産を希望している」(24)
性感染症	不安	「性感染症に罹患した」「性感染症かもしれない」「陰部にかゆみがある」(5)
	疑問	「どうして性感染症になるのか」(1)
LGBT	性自認	「自分の性別に違和感がある」「スクール水着を着用したくない」「兄がトランスジェンダーだが、母がそれを受け入れられていない」(7)
	性的指向	「『バイセクシャルである』というカミングアウト」「同性を好きになってしまった」(3)
性に関する知識	興味関心	「性について新たな知識が知りたい」(3)
性的欲求	性衝動	「好みの女性を見ると接近したくなる衝動に駆られる」(2)
その他		「高校生の結婚」「アダルトサイトからの料金請求」「家出をして見知らぬ男性とホテルに泊まり歩いた」「障害のある友人から、性行為について相談を受けた」(6)

記述で回答させた。107人から回答が得られ、その内容を言葉からコードを抽出し、類似する内容に分類したものをサブカテゴリー化し、さらにカテゴリー化した結果、『異性との関わり』、『月経』、『性被害』、『二次性徴』、『性交渉』、『避妊』、『妊娠』、『性感染症』、『LGBT』、『性に関する知識』、『性的欲求』、『その他』の12個に集約できた。占めるコード数が最も多いのは『妊娠』、『性交渉』、『月経』であった（表10）。

④児童生徒から性に関する相談を受けた経験の有無と性に関する知識について検討した結果を表11に示した。相談を受けた経験があるのは男女ともに「高得点群」であり、男性16人（34.8%）、女性23人（36.5%）であった。女性では、性に関する相談を受けた経験の有無と性に関する知識の得点群との間には有意差が見られた（ $p<0.05$ ）。低得点群は他群と比較し、性に関する相談を受けた経験がない人が多い傾向が見られた。男性では、有意差は見られなかった。

⑤「校長・副校長・教頭」「教諭」「養護教諭」「栄養教諭」の職種と性に関する知識について検討した結果を表12に示した。女性では、職種と性に関する知識の得点群との間には有意差が見られた（ $p<0.001$ ）。残差分析の結果、「養護教諭」はその他職種より高得点群が多い傾向が見られた。男性では有意差は見られなかった。

表11 児童生徒から性に関する相談を受けた経験の有無と性に関する知識との検討（N=532）

	男性（n=257）						χ^2	女性（n=275）						χ^2
	低得点群 (n=45)		中得点群 (n=166)		高得点群 (n=46)			低得点群 (n=44)		中得点群 (n=168)		高得点群 (n=63)		
	n	%	n	%	n	%		n	%	n	%	n	%	
ある（n=148）	7	15.6	38	22.9	16	34.8	n.s.	7	15.9	57	33.9	23	36.5	*
ない（n=384）	38	84.4	128	77.1	30	65.2		37	84.1	111	66.1	40	63.5	

* : $p<0.05$ n.s.:有意差なし

表12 職種と性に関する知識についての検討（N=532）

	男性（n=257）						χ^2	女性（n=275）								χ^2
	校長・副校長・教頭 (n=48)		教諭 (n=210)		養護教諭 (n=1)			校長・副校長・教頭 (n=18)		教諭 (n=216)		養護教諭 (n=35)		栄養教諭 (n=6)		
	n	%	n	%	n	%		n	%	n	%	n	%	n	%	
低得点群 (n=89)	6	12.5	39	18.6	0	0.0	n.s.	1	5.6	42	19.4	0	0.0	1	16.7	
中得点群 (n=334)	31	64.6	135	64.3	0	0.0		11	61.1	141	65.3	14	40.0	2	33.3	
高得点群 (n=109)	9	18.8	36	17.1	1	100.0		6	33.3	14	6.5	21	60.0	3	50.0	

*** : $p<0.001$ n.s.:有意差なし

考 察

小中学校教員を対象に、性に関する知識に関する質問紙調査を実施した。

小中学校教員の性に関する知識については、平均点が10.1点(±3.51)で、全問に正解すれば20点であり、全体的に知識が高いとは言えなかった。正解できた者が多い項目は、全体で「コンドームを使用すれば、確実に避妊をすることができる」478人(89.8%)、「人工妊娠中絶は、妊娠期間中であればいつでもできる」474人(89.1%)であった。正解者の少ない項目は、「アフターピルを用いれば、9割は妊娠を回避できる」94人(17.7%)、「性器クラミジア感染症の罹患者数が最も多いのは、10代の女性である」98人(18.4%)であった。コンドームとアフターピルはそれぞれ避妊方法の1つであるが、正解率に大きく違いが見られた。日本家族計画協会家族計画研究センターの調査¹⁶⁾によると、「あなたは、『緊急避妊法』『モーニングアフターピル』『性交後避妊』のいずれかの言葉を聞いたことがありますか」に「聞いたことがある」と答えたのは33.2%であり、アフターピルの認知度はあまり高くない。調査対象の教員も同様にアフターピルについての知識がないのだろう。しかし、現在は高等学校保健体育の教科書の図説でもアフターピルについて扱われることもあり¹⁷⁾、今後理解が進むことが期待できる。また、性器クラミジア感染症については、高等学校保健体育の教科書に記載されている¹⁸⁾が、罹患者の多い年代については記載されていない。このことから、性感染症の疾患名や症状について理解していても、それ以上の情報を知るには自らが興味を持ち、積極的に学ぼうとしなければ新たな知識を得ることができず、正解率を下げた要因と考えられる。しかし、村上と赤井¹⁹⁾によると、「学校現場の教員は、不登校や学習支援が困難な生徒への対応など多くの問題を抱えながら性教育と向き合っている」としている。すなわち、教員が個人で性に関する知識を学ぼうとするのは時間的に困難であると推測できる。女性では知識が低い者は児童生徒から性に関する相談を受けた経験がない者が多かった。子どもたちは、性に関する相談を養護教諭にしていることが推測される。すなわち、養護教諭は性に関する知識も高いためこのような結果になったと思われる。また、子どもは性知識のあまりない教員には性に関する不安や悩みを相談しにくいのではないかと思われる。子どもたちが性に関する悩みを一人で抱え込み、苦しむことがないように、すべての教員は性に関する正しい知識を持つ必要があるだろう。また、男女間で正解率に大きな差があった項目は、「子宮頸がんは、ウイルス性のがんである」であり、正解は男性73人(28.4%)、女性124人(45.1%)であった。子宮頸がんは、ヒトパピローマウイルスによる感染を原因とするウイルス性のがんである。大見ら²⁰⁾の大学生対象の調査で、子宮頸がんの発生年齢、検診対象年齢、ワクチン対象年齢について女性の方が男性よりも認知が高いと報告し、本調査と同じ傾向にあった。女性だけが罹患する疾患であることが男女間で認知の差を生んでいるのではないかと考えられる。しかし、ヒトパピローマウイルスは性交渉を介して男性も感染し、保菌者となることから、子宮頸がんは決して「男性には関係のない疾患」ではない。「男性の問題」「女性の問題」と性別で区切るのではなく、お互いの性について理解を深めることが重要であると考えられる。

また児童生徒から今までに受けた性に関する相談内容で多かったのは、「妊娠」「性交渉」「月経」についてであった。「妊娠」「性交渉」について、中学生・高校生対象の調査²¹⁾では、「いままでに、セックス(性交)の経験がある」と答えたのは、中学生男子3.7%、中学生女子4.5%、高校生男子13.6%、高校生女子19.3%であった。高校生女子では、約5人に1人性行為の経験があると言

える。高校1年生対象の調査²²⁾では、「男子高校生のセックス」に77%、「女子高校生のセックス」についても76%が肯定的な回答をしている。また、男子高校生対象の調査²³⁾では、高校3年生の66.7%が異性との交際限度を性交までとしており、性交渉を行うことに対して肯定的な高校生は多い。しかし、高坂と澤村の大学生対象の調査²⁴⁾によると、大学生が性交渉を行う理由について男子は「自分の欲求や興味を満たすため」「周りの友人に対し性行為をしていることを当然視されたり、見せつけたいという欲求のため」が多く、女子は「恋人からの求めに応じるため」が多いという。このことから、中学生や高校生も「周りが性交渉をしているから」という焦りや「恋人に嫌われたくない」という思いから性行為を行い、後悔したり不安に思っている生徒も多いのではないかと推測できる。また、性行為を行う際、コンドームを必ず使用する高校生は男子で65.4%、女子で50.2%に過ぎず²¹⁾、膈外射精などの誤った避妊法を信じている高校生も少なくない²⁵⁾。秋元²⁶⁾によると、コンドームを使用しても約15%の失敗率があるという。性交渉をすることによる妊娠の可能性は理解していても、中高生はそれを自らに起こりうるものとして考えることができず、月経が遅れるなどの妊娠の兆候が出てきた場合に不安になり教員に相談しているのではないかと考えられる。また「月経」については、月経周期が安定しないことや辛い月経痛があることについて児童生徒から相談された教員が多く見られた。横田ら²⁷⁾の女子中学生・女子高校生対象の調査によると、月経痛について「ある」「時々ある」と答えた者は中学生で65.8%、高校生で70.5%おり、その中で「かなりの痛みがありとても辛い」、「耐えられないほどの強い痛みがある」と答えたのは中学生で22.3%、高校生で29.6%であった。月経について、学校生活に支障が出るほどの症状を持つ児童生徒も少なくないと考えられる。月経痛が重度の者は婦人科系の疾患を持っている可能性もあるため、教員は病院受診を勧めることも必要である。また子どもたちが「月経は病気ではない」という考えで苦痛を我慢することのないように指導していくことも必要であると考えられる。また、相談内容には、「LGBT」「デートDV」「リベンジポルノ被害」等も挙げられている。これらは、近年新たに出現してきた性に関する課題である。大学生対象の調査²¹⁾によると、自身の恋愛対象について「異性」と答えたのは男子で95.3%、女子で88.7%だったが、「同性」「異性・同性どちらも」と選択した人は男子で1.6%、女子で6.1%みられ、異性愛の者ばかりでないことを示している。また、廣原と富岡の調査²⁸⁾によると、「養護教諭の36.6%は性同一性障害と疑われるまたは診断されている子どもたちと関わった経験がある」とし、自身の性的指向や性自認について悩みを持つ子どもたちが学校に在籍する可能性が少なくないことを明らかにしている。また、デートDVやリベンジポルノは学校だけの解決は難しく、警察などの関係機関との連携が重要になってくると考えられる。性的マイノリティや性被害について教員に相談することは、子どもにとっては非常に勇気のいることであろう。性について悩む子どもたちの思いに答えるためにも、教員は性に関する新しい課題について把握しておく必要がある。性に関する指導についてのマニュアルや通達等を関係する教員だけでなく全教員に周知し、最新の知見を身につけることが重要であろう。

管理職や教諭など職種ごとに性に関する知識を見ると、養護教諭は他の職種と比較し、知識が高かった。このことから、養護教諭が主体となり、性に関する指導について教員同士が相互に相談しやすい環境づくり、教員が性に関する知識を身につけられる研修会等の実施、養護教諭が気軽に性に関する知識を教員に伝達できるような取り組み、あるいは担任と養護教諭がTT形式で指導を行うこと等が望ましいと考えられる。また、教員養成の大学で「性」や「ジェンダー」と名のつく講

義を開設している大学は少ない²⁹⁾ため、学生時代に性に関する諸問題や情報に触れる機会があまりないために、性に関する知識がついていないと思われる。教員養成機関では、教職科目の中で教育心理や道德等と合わせて性についての内容も扱う「保健学」のような授業を取り入れたり、既存の講義の中で性に関する内容を一部扱うなどの取組みが必要であろう。

性に関する語句については、「家族計画」「デートDV」で、男性よりも女性の方が語句とその意味についてよく理解していた。理解や認知が低かったのは、「性別違和」、「デートDV」であった。「性別違和」は「語句について聞いたことはあったが、意味は知らなかった」「語句について聞いたことがなかった」合わせて男性83人(32.3%)、女性59人(21.5%)であった。性別違和は従来「性同一性障害」と呼ばれていたが、2014年発行のDSM-5³⁰⁾により「性別違和」と名称が変更されている。文部科学省が2015年に教職員向けに発行したマニュアル³¹⁾では「性同一性障害」という呼び方がされているため、「性別違和」については認知が低い結果になったと考えられる。社会的には性的マイノリティについての言葉を聞く機会は多くなった⁵⁾が、まだ正確な内容までは理解されていないのだろう。また、「デートDV」は「語句について聞いたことはあったが、意味は知らなかった」「語句について聞いたことがなかった」合わせて男性71人(27.6%)、女性61人(22.2%)であった。教育学部所属の大学生対象の調査³²⁾でもデートDVについての理解は低かった。一方、須賀らの小学校・中学校・高等学校・特別支援学校教員対象の調査³³⁾では、「DVとはどのようなものなのか知っている」で教員は4点満点中平均3.56点という高い得点であった。このことから、「DV」については理解が高いが、「デートDV」については理解が低いことが推察できる。高校生・大学生対象の調査²¹⁾によると、「友達つきあい干渉」「精神的暴力」「性的行為の強要」など恋人からデートDVを受けた経験のある者は高校生男子12.7%、高校生女子19.5%、大学生男子21.6%、大学生女子20.3%と決して少なくない。どのようなことがデートDVに当たるのか、教員も知る必要があり、男女ともに被害者にも加害者にもなりうること、男女交際では、お互いの人格を尊重し、高め合うことが大切であることを児童生徒にも指導していく必要があるだろう。

まとめ

A県の小中学校教員を対象に性に関する指導の課題を明らかにするため、性に関する知識と指導観及び価値観・倫理観について質問紙調査を行った。本研究は調査対象が1つの県に限定されたものであるため、小中学校教員全体の一般知識であるとするには無理があるが、おおよその教員の傾向は捉えることができたと考えられる。

小中学校教員の性に関する知識は全体的に低いことが明らかとなった。コンドームや人工妊娠中絶についての知識はあったが、アフターピルや性器クラミジアについての知識は特に低い結果となった。性に関する知識について、業務が多忙な教員が自ら学ぶ時間を作ることは困難であろう。知識が高い養護教諭や、産婦人科医や助産師等の外部講師による性に関する研修会の実施や、教員養成機関など学校現場に出る前の段階で、教員が性に関する知識を高めることができるような機会を作ることが望ましいであろう。また、児童生徒から性に関する相談を受けた経験を持つ教員も約3割見られ、性交渉や妊娠、月経についての相談を受けている教員が多かった。リベンジポルノ被害やデートDV、LGBTなど新たな性に関する課題について相談を受けた経験のある教員もいたこ

とから、教員自身も自らの性に関する知識を新たにすることができるよう、性に関する話題に意識をむけることが必要であると考えます。

謝 辞

本研究を行うにあたり、質問紙調査にご協力くださった多くの先生方に深謝申し上げます。皆さまのご協力により貴重なデータを得ることができました。ありがとうございました。

注

- 1) 厚生労働省. 「性感染症報告数」(2020年8月10日閲覧).
<http://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0411-1.html>
- 2) NLLD 国立感染症研究所. 「日本の梅毒症例の動向について」(2020年8月10日閲覧).
<https://www.niid.go.jp/niid/images/epi/syphilis/2019q4/syphilis2019q4c2.pdf>
- 3) 厚生労働省エイズ動向委員会. 「平成30(2018)年エイズ発生動向-概要-」(2020年8月10日閲覧).
<https://api-net.jfap.or.jp/status/japan/data/2018/nenpo/h30gaiyo.pdf>
- 4) 内閣府. 「青少年のインターネット利用環境実態調査」(2020年8月10日閲覧).
https://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h30/net-jittai/pdf/kekka_gaiyo.pdf
- 5) 日高康晴. 2017. 「学校に求められる LGBT の生徒への理解と支援」『日本教育』468, 6-9.
- 6) 茨城県. 「いばらきパートナーシップ宣誓制度を実施しています」(2020年8月10日閲覧).
<https://www.pref.ibaraki.jp/hokenfukushi/fukushi/jinken/ibarakipartner.html>
- 7) 大阪府. 「[大阪府パートナーシップ宣誓証明制度]について」(2020年8月10日閲覧).
http://www.pref.osaka.lg.jp/jinken/sogi_partnership/index.html
- 8) いのちリスペクト. ホワイトトリボン・キャンペーン. 「LGBTの学校生活における実態調査」(2020年8月10日閲覧).
<https://uploads.strikinglycdn.com/files/8d7e95ad-0caf-4bec-b185-33e045b61728/LGBT%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%95%E3%83%AC%E3%83%83%E3%83%88.pdf#search=%27EF%BC%AC%EF%BC%A7%EF%BC%A2%EF%BC%B4%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E7%94%9F%E6%B4%BB%E5%AE%9F%E6%85%8B%E8%AA%BF%E6%9F%BB2013%27>
- 9) 上野陽子・高瀬美由紀・小林敏生. 2018. 「教育機関で助産師が行う性教育のあり方～高校生の性教育への「関心」と関連要因の検討～」『母性衛生』59(2), 501-510.
- 10) 橋本紀子・篠原久枝・田代美江子ほか. 2011. 「日本の中学校における性教育の現状と課題」『女子栄養大学教育学研究室紀要』9, 3-20.
- 11) 西頭知子・佐々木くみ子・佐々木綾子・末原紀美代. 2013. 「過疎地中学校の性教育の現状分析から過疎地中学校のセクシュアリティ教育構築への提言」『大阪医科大学看護研究雑誌』3, 109-119.
- 12) 遠藤紗貴子・中野明徳. 2006. 「思春期・青年期における性教育のあり方についての一考察-教員へのアンケート調査から-」『福島大学総合教育研究センター紀要創刊号』1, 9-16.
- 13) 下野純平・渡来優子・中岡恵美子ほか. 2018. 「看護大学生が学校現場で小中学生を対象に性教育を行う

- ことに対する養護教諭の見解」『千葉科学大学紀要』11, 231-236.
- 14) 足立朋子・大橋一友. 2019. 「中学校教員の妊孕性知識量と妊孕性教育に対する負担感の関連」『母性衛生』59 (4), 729-736.
 - 15) 日高庸晴. 「教員 5979 人のLGBT意識調査レポート」(2020年8月27日閲覧).
<https://www.health-issue.jp/kyouintyousa201511.pdf>
 - 16) 日本家族計画協会家族計画研究センター. 「「第6回男女の生活と意識に関する調査」結果(概要)」(2020年8月10日閲覧).
[http://www.koshueisei.net/upfile_free/20130118kitamura.pdf#search=%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%AE%B6%E6%97%8F%E8%A8%88%E7%94%BB%E5%8D%94%E4%BC%9A+%E7%AC%AC%E5%9B%9E'](http://www.koshueisei.net/upfile_free/20130118kitamura.pdf#search=%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%AE%B6%E6%97%8F%E8%A8%88%E7%94%BB%E5%8D%94%E4%BC%9A+%E7%AC%AC%E5%9B%9E)
 - 17) 大修館書店編集部編. 「図説現代高等保健」(大修館書店).
 - 18) 和唐正勝, 近藤卓, 衛藤隆ほか. 「現代高等保健体育」(大修館書店).
 - 19) 村上道子・赤井由紀子. 2016. 「学校現場で助産師が行う性教育のあり方—教員の質問紙調査から—」『母性衛生』57 (2), 410-414.
 - 20) 大見広規・石川弘枝・高橋奈緒子ほか. 2011. 「大学生のヒトパピローマウイルスと子宮頸がん予防ワクチンについての認知度と態度」『CAMPUS HEALTH』48 (2), 163-168.
 - 21) 日本性教育協会編. 「「若者の性白書」—第8回青少年の性行動全国調査報告—」(小学館)
 - 22) 平岡友良. 2003. 「高校生の性および性教育に対する意識調査」『思春期学』21, 192-199.
 - 23) 廣原紀恵. 2010. 「男子高校生の性意識調査について」『インターナショナルNursing Care Research』9 (1), 115-124.
 - 24) 高坂康雅・澤村いのり. 2017. 「大学生が恋人とセックス(性行為)をする理由とセックス(性行為)満足度・関係満足度との関連」『青年心理学研究』27, 29-42.
 - 25) 染矢明日香. 2019. 「若者の避妊の知識の現状」『助産雑誌』73, 354-359.
 - 26) 平岩幹男編著, 佐藤武幸著. 『思春期の性の問題をめぐって—現状とその対応から教育まで—』(診断と治療社) p115-126.
 - 27) 横田あゆみ・小野里恵・高山明子ほか. 2016. 「月経痛のある女子中高生の対処行動とコントロール感—鎮痛剤使用に焦点を当てて—」『日本教育保健学会年報』23, 33-43.
 - 28) 廣原紀恵・富岡志織. 2015. 「性同一性障害に対する養護教諭の認識と支援について」『茨城大学教育実践研究』34, 97-111.
 - 29) 数見隆生. 2011. 「教員養成大学における「人間と性」授業実践と学生の学び」『学校保健研究』52, 442-448.
 - 30) 日本精神神経学会監修. 「DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル」(医学書院).
 - 31) 文部科学省. 「性同一性障害や性的指向・性自認に係る, 児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について(教職員向け)」(2020年8月10日閲覧).
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/04/_icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369211_01.pdf#search=%27%EF%BC%AC%EF%BC%A7%EF%BC%A2%EF%BC%B4+%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81%27
 - 32) 粟野智美・廣原紀恵. 2019. 「教育学部大学生の性に関する知識と指導に対する考えについて」『茨城大学

教育実践研究』68, 285-296.

- 33) 須賀朋子・森田展彰・斎藤環. 2014. 「思春期世代を教育する教員のDVの知識と予防教育への考え」『思春期学』32(2), 265-271.